

研究課題 (テーマ)	富山県立大学女子学生の HPV ワクチン接種の実態と接種行動の関連要因の探索～子宮頸がん予防に関するヘルスリテラシー向上への支援構築に向けて～		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	講師	北島友香
分担者	看護学部看護学科	准教授	村田美代子
	看護学部看護学科	教授	松井弘美
研究結果の概要			
<p>子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチンの接種によって発症予防が可能ながんである。日本では、2022 年のワクチン接種の積極的勧奨再開後、2025 年 3 月まで 1997～2006 年度生まれの女性を対象にキャッチアップ接種が行われ、本学でも富山県医師会の委託を受けて学生を対象に啓発活動を実施した。しかし、子宮頸がん予防には、キャッチアップ接種世代の子宮がん検診率の向上や今後の定期接種対象者のワクチン接種率の向上が必要であり、ヘルスリテラシー向上が求められている。そこで、富山県における子宮頸がんに関するヘルスリテラシー向上に向けた取り組みの示唆を得るため、富山県立大学女子学生の HPV ワクチン接種の実態と接種行動の関連要因を明らかにすることを目的とした。</p> <p>本学に所属する 1997～2006 年度生まれの女子学生を対象に、基本属性、ワクチンの接種状況、子宮頸がんや HPV ワクチンに関する情報源、ワクチン接種の主な動機、子宮頸がんや HPV ワクチンに対する印象、子宮がん検診の受診意向などを問うウェブアンケート調査を実施した。</p> <p>269 名のデータを分析対象とし、2025 年 3 月時点で 230 名が HPV ワクチンを接種していた (接種率 85.5%)。接種学生における子宮頸がんや HPV ワクチンに関する情報源は、「自治体からの個別案内」、「親」、「大学掲示の啓発ポスター」の順に多かった。また、接種の決め手となったものは、「母親のすすめ」、「無料で接種できること」、「自治体からの個別案内」の順に多かった。接種者は非接種者に比べて「HPV ワクチンは将来の自分の健康に必要」と回答する者が有意に多かった。一方で、非接種者は接種者に比べて「副反応が心配」、「リスクについての十分な情報がなく安全性に懸念がある」と回答した者が有意に多く、「他のワクチン同様に必要なワクチン」、「子宮頸がんは若い女性での罹患者が多い」と回答した者は有意に少なかった。今後の子宮頸がん検診の受診意向は、「受けようと思わない・わからない」16.7%、「気が向いたら受けようと思う」34.6%、「症状があれば受けようと思う」11.5%、「ぜひ受けたい」5.2%であった。</p> <p>ワクチン接種率は高く、本県の取り組みの成果はあると言える。接種者の情報源や接種の動機となったものは、個別案内や親や大学などからの情報であり、学生にとってより身近でかつ個人に訴えられていると感じられる媒体であった。HPV ワクチン接種率は高い結果であった一方、子宮頸がん検診を受けようと思う者の割合は低く、がん検診受診を動機づけとなるほどの、子宮頸がん予防に対する関心や認識は不十分であることがうかがえた。</p>			
今後の展開			
<p>HPV ワクチン接種対象者に対して、対象が身近に感じる位置から自身の将来の健康を見据えられる情報提供や啓発活動の方法を考えていく。また、キャッチアップ接種における啓発活動の成果を活かし、今後は子宮頸がん検診に対する啓発活動方法の検討とその効果の検証が必要。</p>			